



# 河岸の月



朝陽遥

いつになく雨のない日の続いたある午後、コダは河辺で一人の子供を拾った。

夕暮れが迫ってもなお太陽は容赦のない陽射しを地上へと投げかけ、乾ききってひび割れた風が、飛沫を上げる水面をわたってようやくひと息をついたというように、わずかばかりの涼気をまとって吹きつけていた。その風の溜まる場所、折れた木の枝だの水草だのが吹き寄せられて集まったあたりに、その子供は落ちていた。

子供といっても、彼自身とさして変わらない年頃の少年だったのだが、コダがそうと気づくには、少しばかりの日にちが要った。何故というならその行き倒れは、あまりに長いことまとまな食べ物を口にしていなかったがために、痩せさらばえて骨と皮しかなかったばかりか、背丈もひどく小さかったからだ。

とはいえコダがこの少年を拾ったのは、何もその姿を哀れに思ったためではなかった。彼はヨキヌの里の首長（ウートラ）の息子だ。彼の祖父の祖父のそのまた祖父が生きていた時代、このあたりの地方が遠い都におわす王様の領土と定まったときから、ウートラは税吏も兼ねるようになったから、里の人々は誰もこれに頭が上がらない。その息子に対する態度も似たようなもので、表立ってコダにたてつく者は、大人も子供もいなかった。それだからコダは当然のこととして、我がままで気まぐれな乱暴者に育った。気にいらぬことがあれば、ほんの小さな童でも容赦なく小突きまわす。それでいて取り入る者を可愛がってみせるほどの知恵もないものだから、しぜん誰からも嫌われる。嫌われていることが判らないほどには愚鈍でもないから、腹を立ててよけいに他人を虐める。

そういう性分の少年だったから、行き倒れを見かけたところで、そうそう拾って助けてやったりするものではない。むしろ追い打ちとばかりに踏みつけて、侮辱の言葉のひとつくらいは投げかけてもおかしくなかった。コダがそうせずに少年を拾って家に連れ帰ったのは、この子供が行き倒れていた場所が、アッロス河のほとりだったからだ。

これは遙かな北の高地から脈々と流れ下る豊かな河で、いくら獲っても獲りつくせぬほどの魚を擁するうえに、ここいら一帯の田畑を潤してもくれる、まさしく恵みの水だ。だがひとつ難があって、何かの拍子に雨が續くと、見る間に氾濫する。河辺の漁師小屋が流されるくらいのはしょっちゅうで、悪くすれば里じゅうがすっかり水に浸かる。そんなときには収穫を目の前にした作物を、きれいに舐めて総ざらいにしてしまう。

そうした土地だから、里の人々は古くからこの大河に棲まう水神をおそれ、その怒りを買うことに怯えながら暮らしてきた。コダの祖母はわけても信心深い一人で、そのため彼は赤ん坊の頃から、水神にまつわる昔語りを繰り返して聞かされて育った。そうしたわけで、自己本位で人の話になど耳を貸さないこの少年にも、ひとつ美德があった。人を人とも思わぬ所業をするが、神は畏れる。

晴れ続きで水嵩の減ったアッロス河のほとりで、流れに顔を半分突っ込むようにして行き倒れている小汚い少年を見かけたとき、コダはまず、このままにしておいては水神さまの怒りを買うのではないかと、そのことを考えたのだった。

コダは行き倒れのそばに駆け寄って、ものも言わずにその襟首をひつつかむと、そのまま流れから離れたところに少年の体を放り投げた。その手ごたえのあまりの軽さに、コダは憐れみよりも、むしろ薄気味の悪さを覚えて顔をしかめた。

だが次の瞬間、彼は息をのんで目を瞠った。

なすすべもなく転がされた少年が、そのとき初めて身をよじり、閉じていた瞼をわずかばかり持ちあげた。そこから覗いた瞳は、澄んだ、あざやかな緑色をしていた。

それは森の奥にひっそりと横たわる淵の色、木漏れ日を受けてきらめく、木陰を映しこんだ水面の色だった。瞼はすぐに再びおりて、瞳はその下に隠れたが、コダはいつとき息を詰めたまま、身動きもとれずに立ちすくんだ。

こんな色の瞳をした人間を、コダは見たことがなかった。そのため彼は、もしやこの少年が水神さまの化身か、あるいは遣いの類ではないかと考えた。もちろんその思いつきは単なる空想にすぎず、コダ自身にもそうとは判っていて、けして確信というようなものではなかった。だが、もしやという思いは、信心深い少年の体を竦ませた。

そうしたわけで、コダは行き倒れを背負い、彼の屋敷へと連れて帰った。

水神さまの話に詳しく祖母はとうに老いて死んでいたが、ともかく家に戻れば、誰かもう少しこの子供の正体に察しをつけきれぬものがあるだろう。そう考えたコダが、枯れ枝のような腕をつかんで自分の肩に回させると、垢にまみれた少年の体は、饅えたいやなにおいを立てた。

少年はかすかにみじろぎをしたが、はっきりとした意識を取り戻す気配はなかった。河に浸かって冷やされていたはずの体は、気味の悪いほど熱くしめっていた。一步を歩くごとにごつごつと尖った骨が背中に当たって、コダは臭いとその痛みとにひどく閉口した。

コダの母親のエレテは、息子の背負ってきた行き倒れの姿をひとめ見るなり、悲鳴をあげて激しく手のひらを振った。そんな汚いものを家に入れるなというわけだった。仕方なくコダは家の前で瘦せた浮浪者の体を下ろし、井戸の水を女中に運ばせた。少年の体を洗い、そのついでに自分も頭から水を被ると、体からはじきに湯気が上がった。

夕陽の沈もうとする中、女中に手伝わせてよく洗ってみると、少年はすっかり見違えた。緑の瞳は開かれなかったが、それでもそばにいた女中たちはどの娘もかすかに息を吞んで手をとめ、その姿に見とれた。癖のある黒髪は瘦せていかにもみすぼらしく額に張り付いていたし、体じゅうどこもかしこも肉が落ち、頬はこけて頬骨が尖っていたが、それでもなおその異相は、女たちの眼を捉えて離さなかった。

すっかり臭いがしなくなると、エレテはようやく少年を家の中に入れて介抱することを許した。そうしてようやく客用の寝台に横たえられた少年の姿を間近に見たとき、彼女もまた呆気にとられたように口を開いて、ものも言わずに見入った。

そんな母親をよそに、コダは少年の濡れた髪を念入りに拭いてやり、そんなふうには他人の世話を焼く彼の姿など目にしたことのない人々をひどく驚かせた。

この少年を背負って運ぶ間じゅう、コダが感じとっていたとおり、少年は熱を出していた。だがコダは、この子供が死んでしまうかもしれないとは端から思いもしなかった。今にも死にゆくという者の手がこんなに熱いわけがないと、彼にはそんなふうには思えたのだった。

それは人の体の仕組みなど知りもしない子供の浅はかな思いこみにすぎなかったが、結果的に少年は回復した。一晩じゅう高熱を出して苦しげに身をよじった挙句、夜明け前になってようやく穏やかな寝息を立て、翌朝の日が昇るのに合わせたように、その緑の目を開いたのだった。

その直前になって数日ぶりの雨が降り始めて、少年の目覚めが雨を呼んだのだという錯覚をコダにもたらした。

普段の傍若無人ぶりをどこかに追いやって、コダは一晩じゅう、甲斐甲斐しく少年の世話を焼いていた。女中に教わったとおりに、濡れた布で少年の唇を湿し、不器用な手つきで汗を拭いてやった。

そうしてようやく目覚めたというのに、少年の深緑の瞳は茫洋と宙をさまようばかりで、ちっともコダをとらえようとはしなかった。そこには安堵もなければ驚きもなく、怪訝なようすも、戸惑いや警戒の色さえ、かけらも浮かばなかった。

女中を呼びつけて、少年に飲ませる水を持ってくるように言いつけると、コダはそのまま枕元に残った。そのまま視線を落として、自分の手元ばかりを見た。意識を取り戻した少年の目をまっすぐに見ることに、気遅れがしていた。柔らかく窓を叩く雨の音が、ますますその畏怖を大きくした。

少年は横たわったまま、ふっと目を伏せた。コダにも自分がいま置かれている状況にも、なんの興味もないというふうだった。

それでコダはようやく、再び少年の姿を直視できるようになった。そうしてみれば、見慣れぬ異相の容貌をしてはいても、ただそれだけの、ただの子供ではないかという気がしてきた。そうすると今度は、自分よりもずっと体の小さな少年ひとりを畏れていたのだという考えが、にわかには羞恥を呼び起こした。それでコダは無理にぞんざいな口調を作って、

「お前、どっから来たんだ」

そう訊いた。だが少年は返事をしなかった。それどころか、視線を上げることもなく、身じろぎのひとつさえもしなかった。

「名前は？」

重ねて訊いたところで、少年はやはり、何の反応も見せなかった。それでコダはようやく、この少年は耳が聞こえていないのではないかという可能性に思いいたった。

その思いつきを確かめるために、コダがさらに何か話しかけようとしたとき、足音が近づいてきた。

水を持った女中とともに、エレテが客間に入ってきた。

「目を覚ましたのですって？」

まさか助かるとは思わなかったという口ぶりで、エレテはいった。だからといって、少年の回復を喜ぶというふうでもなかった。彼女は少年に近寄ろうとせず、遠巻きに少年を見遣った。その母親に向かって、コダは訊いた。

「こいつ、うちに置いてもいいだろ」

エレテはうなずかなかった。戸惑ったように目をしばたいてから、

「さあ、どうかしら。お父様に訊いてみないことにはね」

そういつて、落ち着かないふうに小さく肩をゆすった。

彼女の夫でありコダの父親であるウートラは、漁についてのとりきめを交わすべく、川下にある隣の里に出向いているところだった。

留守のあいだによそものを家に上げたことについて、夫が怒るのではないかと、彼女は考えたのだった。ウートラは吝嗇家で、わずかといえど彼の金を使って、浮浪者などに施しをしたと知れば、少なくとも不機嫌になることは間違いなかった。

コダにとってもそうしたウートラの性格は承知のことで、父親が無駄飯ぐらいを増やすような真似を許すとは、とうてい思えなかった。可能性があるとするれば、少年が給金のいらぬ小間使いとして、家のことなりウートラの仕事を手伝う道だったが、耳が聞こえず口もきけないとなれば、それも難しいだろう。

だが意外にも、宵の口に帰宅したウートラは、少年を家に置くことを認めた。

帰ってきて、妻の口からことの顛末を聴くと、はじめ彼は家人の予想どおり、機嫌を損ねて眉間にしわを寄せた。だが、実際に客間に寝かされてぼんやりと天井を見つめる少年の姿を目にするなり、ころりと態度を変えた。目に見えて上機嫌になり、口には珍しく笑みさえ浮かべて、「まあ、いいだろう」と言った。

父親の心中に何が起きたのか、コダには計りかねた。それはエレテにとっても同じことだった。自分の

得にならないことのためには指一本動かすことさえ嫌がるこの男の性分を、二人とも知りぬいていた。

だがウートラは心境の変化について家族に説明しようとはしなかった。ただ客間ではなく、コダの部屋に少年を移すように言いつけた。彼の客間は、首府から役人がやってきた場合に供えて、辺境の鄙びた里には不似合いにすぎるほど、調度に金をかけてあった。どこの馬の骨ともしれぬ子供を泊めるのに、この客間を使わせるものがあるかというので、彼は妻を叱りつけたが、小言はそれきりだった。

そうしたわけで、少年の居場所はコダの部屋の隅になった。

死んだコダの祖母が使っていた、すっかり古びてやたらと軋む寝台が運び込まれると、彼の部屋は途端に窮屈になった。名前の判らないこの痩せた子供は、日がな一日その上で、天井をぼんやりと見上げて過ごした。

少年は目を覚ましていても、眠っているのと同じほど静かだった。いくら体が弱っているとはいえ、果たして生きた人間がこうもじっとしてばかりいられるものかと驚くほど、ほとんど身動きらしい身動きをしなかった。与えられるものは素直に口にしたが、何も与えられなければそのまま静かに飢えて死ぬのではないかと見えた。黙って女中に体を拭かれる間も、嫌がることもなければ、感謝のようすをみせることもなく、ただ感情の見えない緑の眼を、何も無い宙に向けていた。

その無表情を見ているうちに、もしかすると本当にこれは水神さまの遣いなのではないかという考えが、しばしばコダの胸に戻ってきた。

女中たちにしてもそれは同じことのように、彼女らは腫れものに触るように、おっかなびっくり少年の世話をした。ときに少年の緑の瞳に見とれては、はっと我に返って怖がるそぶりを見せた。そうして、家人がそばにいないと見るや、こそこそとひそめた小声で、少年の正体について不安げに噂をした。

エレテもまた似たようなものだった。たまに気まぐれのように様子を見に来ることがあったが、いつもどこか怯えを隠すような目をしていて、けしてみずから少年の世話を焼くことはなかった。

彼女に新しく増えたこの家人を歓迎するそぶりはまるで見られなかったが、追い出そうとすることも、またなかった。それもそのはずで、もとよりエレテは夫の決めたことには一切の文句を言わない女だった。

夫を頼み、その判断を信頼しているというわけではない。自分のいまの暮らしが、夫の地位あつてのことだということを、重々承知しているがためだった。

エレテは若い時分、近隣でもっとも美しいといわれていた女だった。また、そうした自分の美貌を鼻にかける女でもあった。持てる者は妬まれやすく、憎まれないためにはそうでない人々よりも一層の注意と努力を必要とするものだが、そうした種類の知恵の回らない女でもあった。

近隣のほかの里からも、男たちがたびたび訪れて彼女に求婚したが、そのことで彼女は余計に周囲の女たちの妬みを買った。里の中でエレテの身の置き所は、月日を追うごとに狭くなってゆく一方だった。そんな中、とうとう彼女はウートラになったばかりだった男に見染められた。

彼女は後に夫となったこの男を、けして好いてはいなかった。彼が貧相な体格をした、どうにも見栄えのしない男だったためということもあったが、それ以上に若きウートラが、その地位を嵩に着た、権高な男だったためだ。

鏡に映る自らの醜さを、人は憎むものだ。エレテはこの若き権力者を嫌悪した。だが男のほうは、まだそのときには彼女が己の鏡になるだろうことに気がついてはいなかった。得てして女の方が己の本性を隠すことに長けているものだ。

かくしてウートラは半ば強引に彼女を娶った。それに逆らうだけの力は、彼女にも、彼女の父親にも持ち合わせがなかった。

エレテは望まぬまま首長夫人となり、いくつかの月の満ち欠けを経たのちには、夫のほうでも徐々に彼女を疎むようになっていった。

だがその頃には彼女のほうで、新しく得た立場を手放す気がなくなっていた。贅沢な暮らしといっても、鄙びた辺境の里のことで、ましてや吝嗇で知られた夫のもとではたかが知れていたが、ともあれ里の人々は彼女に頭を下げた。少なくとも面と向かって彼女を馬鹿にしたり、嫌がらせをしたり、恥をかかせて笑いにしようという女はいなくなった。そのことのほうが、暮らしの豊かさよりもなお、彼女にとっては重要だった。

彼女はじきにコダを産んだ。夫の言い分にはすべて黙って従い、夫の不貞に見て見ぬふりをし、けして愛されはせずとも理由をつけて追いつくほど邪魔にはならぬ、都合のいい妻の座に落ち着いた。

そうした夫婦だったから、コダが物心ついてからこちら、彼らの間に愛情らしき愛情のあったためしかなかった。育つにつれて父親に似てきたコダを、しだいに両親のどちらもが疎むようになったが、エレテは彼を産むときに腹を痛めて以来、次の子を孕むことがなかったから、ひとりきりの子供を否応なく大事に育てるほかなかった。

この家の中にあっただのは、利得と打算、それに体裁と保身だった。女中は無理の透けて見える態度で彼に頭を下げた。誰も彼に向かって本音でものをいわないことを、コダは当然のこととして生きてきた。

それだから、新しく家に入ってきたこの少年の徹底した無関心は、コダにとってはむしろ新鮮だった。少年が口をきかないことも、ほとんど苦にはならなかった。年若い少年がふたり、部屋で黙り込んでじっと顔を突き合わせているというのは、傍から見ればいかにも妙な図だっただろうが、コダは気にしなかった。口がきけるからといって、どのみち嘘と建前ばかりの言葉しか吐き出さないぐらいなら、いっそ何も言わないでいるほうがよほどましというものではないか。

コダは家から出歩くことをめったにしなくなった。出掛けても、せいぜいが河沿いにひとけの少ない時間を選んでぶらぶらと歩き回り、そのまま誰にも会わずに帰るばかりだった。以前には機嫌の悪い日にはよく里の子供らを虐めて憂さを晴らしていたが、どのみちたいした気晴らしになりはしないのだ。どこにいても、いるのは表立っては愛想よく振る舞って、殴られてもへらへらと笑って見せながら、さげた頭の下では舌を出す人間ばかりだった。そんな里の人々に、彼は飽き飽きしていた。

返事の返ってこない相手に向かって、コダは時おり、思いつくままに話しかけた。祭りの日にだけ振る舞われる酒を、大人たちの眼をぬすんでくすねたときの武勇伝だの、アッロス河の流れを月のない晩にさかのぼってくる魚の大きさがどうのというような、たわいのない話ばかりだった。ときにはそこに、死んだ祖母が彼に語り聞かせた昔話が混じった。かつて水神の怒りを鎮めるべく河に捧げられた生贄の子供らのこと。水神の化身が大蛇の姿をとって姿をあらわし、里の娘を攫って山に姿を消したときの話。そうした話にも、少年はとりたてて反応を見せなかった。

話題が何であれ、少年の無関心は徹底していた。やはりこの子供は何も聞こえていないのだろうと、コダは納得した。それでも気にせず、コダは気の向くままに話した。耳の聞こえない相手に向かって話すことにいったい何の意味があるのかと、自分でもときどき馬鹿らしく感じはしたものの、妙なもので、どうせ相手には聞こえていないのだという気楽さが、かえって口を軽くした。

そんな彼らの姿を見咎めて、女中たちは薄気味の悪そうな目つきをしたが、コダは気にしなかった。嫌われるのも気味悪がられるのも、どのみち彼にとっては大差がなかった。

少年は日がな一日寝台に横たわっているか、せいぜいが腰かけてぼんやりと宙を見つめているばかりで、寝ているのか起きているのかもよくわからないことが多かったが、それでも日に四度、差し出されるままに食事を摂っているうちに、やがて少しずつ肉がつき、遅れて血色も戻ってきた。

そうして体が恢復の兆しを見せるにつれて、少年は眠りのうちに魘されるようになった。

低くねじれた呻きが耳に飛び込んで、コダが跳ね起きたとき、まだあたりは真夜中だった。はじめは聞き間違いかと思ったコダだったが、耳を澄ませてみれば、やはりその声は少年のものだった。

それまで一度も口をきいたことがなかったものだから、コダはそもそもこの子供が、声が出せないものだとはばかり思い込んでいた。だがいま名も知らぬ少年は、たしかに夢の中で呻いていた。その言葉にならない唸り声は、コダの耳に、悲鳴のように聞こえた。

コダは寝台から下りて少年の枕元に歩み寄った。魘されているのが可哀相だから起こしてやろうかというよりも、うるさくて自分が寝付けなかったためだった。

午後に激しく降った雨はすでに上がって、開け放していた窓からは乾ききらない湿った夜気とともに、青白い月の光が斜めに入りこんでいた。

いくらか肉が戻り始めたといっても、少年の肩はいまだ薄く骨ばっていた。それをコダが掴んで揺さぶると、少年はその手を激しく跳ねのけて、大きく目を見開いた。

月光の下で見るその瞳は、木漏れ日を受けて煌めく淵のようではなく、午後の強烈な日差しの下で黒々と沈む木陰のような、暗く底の知れない色をしていた。

このとき少年の顔にあらわれた表情を、コダは前にも見たと、とっさにそう感じた。おかしい話だった。拾ってきた日こそ、少年は熱に浮かされて苦しい顔をしていたが、それ以降は人間とも思えないような無表情を貫いて、感情らしい感情をけっして見せたためしなかったのだから。

だがコダが記憶の糸をたぐりよせるよりも早く、少年はいつもの無表情に戻った。少年はこわばっていた手から力を抜いて、コダの顔を見るともなく、ぼんやりと見返した。

コダは正体のわからない不安に駆られて、視線を少年の顔から外した。背を向けて自分の寝台にもぐりこみ、眠ろうとして目を閉じたが、眠気は一向に訪れなかった。いつにも増してひどく蒸し暑い夜で、それがますます眠りを妨げた。

背中越しに感じる少年の気配はひどく希薄で、コダには少年が再び眠りに落ちたのか、あるいは自分と同じように寝付けずにいるのか、見当もつけられなかった。

翌朝、日が昇るのを待って寝台から這いだしたコダは、水を浴びようとして、女中を呼びつけた。

水汲みは重労働だ。ここらの里に井戸はなく、みな河から汲んだ水を運んで使う。夜明け前に起きだして一日に使うだけの水を汲むのは、この家では決まって一番新入りの女中の仕事だった。夜の明けるよりもずっと前に起き出して、何度も河まで往復しなくてはならない。そのうえウートラの屋敷は里の中でもっとも河から離れた高台に建っている。これに音をあげて早々に暇を取る若い女中も多かった。

このときの女中もすでに日々の仕事に嫌気がさしているのが目に見えるありさまで、無言でコダに桶を差し出した手つきは、ひどくぞんざいなものだった。それでも、その手に目を留めたコダの表情から彼の

不機嫌を察すると、女中は慌てて顔を伏せた。

コダはその頭を掴んで、強引に顔を上げさせた。特に考えがあつてしたことではなかった。この女が下げた頭の下で、どんなふうに笑って舌を出しているものか、見てみようとしたのだ。

女は笑ってはいなかった。コダとさして変わらない齡ごろの若い女中は、ひどく怯えた顔をして、視線をおぼつかなくさまよわせた。その卑屈なさまを鼻で笑って、コダは手を放した。女は後ずさり、逃げるようにして駆け去った。

中庭に出て水をかぶっても、眠気は重くまとわりついたまま、一向に去ろうとしなかった。コダは庭に打ち捨ててあつた古い甕に腰掛けて、そのままぼんやりと、桶の底に残った水を見つめた。このところ鳴りを潜めていた苛立ちが、久しぶりに胸を塞いでいた。

やがてさざ波立っていた水面が静まり返ると、コダはそこに映つたものを見て、はっとした。

昨夜、いつかどこかで見たとつたあの顔が、そこにあつた。いや、顔立ちにはどこも似通つたところはない。だがそれにも関わらず、驚くほどふたつの顔はよく似て見えた。

水面におぼろに映る自分は、誰も信じないという目をしていた。

その日から、少年はたびたび驚されるようになった。夢の中から響く悲鳴は、いつも小さく掠れたもので、ほかの家人を起こすまでにはいたらなかったが、コダは毎晩のように眠りを破られた。

夜ばかりではなかった。暑い地方のことで、もっとも日の高くなる正午からのいつの間、誰もが陽射しを避けて昼寝を決め込む。そうした午睡の間にも、少年はしばしば夢に驚された。

かと思えば、じっと座つたまま、何かを考えこむような顔つきをするときがあつた。そういうとき、コダが傍に寄ると、少年は気配を察して顔を上げ、そのたびに何かを迷うような、困惑したような顔になった。

そうやって人なみの表情を取り戻してみると、もう少年は、水神の化身だの遣いだのというようなには見えなかった。

ある日の午後おそく、皆が午睡からさめて再び動き始めるころ、コダは少年に向かって、子供の頃のことを、とりとめなくぼつぼつと話し聞かせていた。幼いころには魚釣りが好きで、河辺に張り付いて一日を過ごしていたことや、森から細々と流れてアッロス河にそそぎこむ小川をさかのぼって、鬱蒼としげる森の奥深くに入り込んだのはいいが、そのうちに夜になってしまったときのこと、調子に乗って獲りすぎた魚を腐らせ、祖母にたしなめられたことなどを。

自分でもすっかり忘れていたことが、次から次に口をついて出るのに、コダは話しながら自分で戸惑つた。少年はコダの話に耳を傾けているとも、聞いていないともつかないような素振りで、あいづちを打つでもなく膝を抱えて、ただじっと座っていた。

その時、窓の外でかすかに草の鳴るのを聞いて、コダはとっさに立ち上がった。

窓辺に座っていた少年の体を押しのけると、コダは一息に窓枠を乗り越えて庭に飛び出した。一人の子供が、いままきにあわてて逃げ出したところだった。

コダはその子供を知っていた。ヤクという名前の、里で一番のちびだった。気が弱く、いつも年かきの子供たちの背に隠れてびくびくと怯えた顔をしているので、かえってコダの目に留まり、よけいに小突かれては泣いて逃げ帰るのが常だった。

コダの半分の背丈にもならないちびすけのことだから、走り方も危なっかしい。コダはすぐに追いついて、ヤクの襟首をひつつかんだ。



「盗み聞きか？ 泣き虫のくせに、今日はずいぶん度胸のある真似をするじゃないか」

コダがそう言って小さな体をぶら下げると、ヤクは空中で短い手足を振りまわした。「放せよ」

「口のきき方のなっていないやつだな」

コダがその小さな体を振りまわすと、ヤクは面白いように目を回した。

「おどかしたって、怖くないぞ、どうせお前ら、じきに死んじまうんだろ」

その口から飛び出した威勢のいい言葉とは裏腹に、ヤクの声には怯えが滲んでいたし、目には早々に涙が浮かんでいた。だがそれよりも、コダは言葉の中身のほうに気を取られた。

「誰が死ぬんだって？」

「みんな、言ってる。ウートラの屋敷は魔物にとっ憑かれて、連中、すっかりおかしくなっちゃまったって。お前らみんな、じきにとり殺されっちゃうにちがいねえって」

「ああ？」

コダは手を放し、ヤクの体を地面に落つことすと、その尻を蹴り飛ばした。それから舌打ちをして、じろりと生垣の外を見た。誰かほかにも隠れているのが、木々の隙間に見えかくれしていた。ヤクが自分ひとりの考えで忍び込んだのではなく、おおかたほかの子供らに、度胸だめしとでもいってそそのかされたのだろう。

ヤクは慌てて立ち上がると、逃げにかかった。蹴られた尻をかばいながらひょこひょここと走るものだから、追いかけるのはいかにも容易だったが、コダはそうしなかった。これまでずっとほかの連中にまじって彼の顔色をうかがってきた泣き虫が、面と向かって彼に反抗してきたことに驚いて、腹が立つよりも、拍子抜けするような思いの方が勝った。

窓枠を乗り越えて自分の部屋に戻ると、少年はかわらず寝台に腰かけたまま、コダを見上げてきた。

コダはその深緑の瞳をいつきのぞきこんで、それからぽつりと呟いた。

「魔物なんかじゃないよな、お前」

少年が答えをよこすはずがなかったが、それでもこの家に来たばかりのころのように、コダの存在を無視することはなかった。その深緑の瞳で、じっとコダのほうを見つめ返していた。

返事がないのを承知の上で、コダはもう一度繰り返した。「魔物なんかじゃ、ないよな」

その日の夜更け、コダは前触れなく目をさました。いつものように少年が騒がれていたというわけではなかった。いつにもまして蒸し暑く、寝苦しい夜ではあったが、そのとき少年は深い寝息を立てて、穏やかに眠っていた。

夕方に降りだした雨が夜半になってようやく上がり、いまは満ちた月が、白々とした光を窓辺に差しかけていた。

コダは寝台から抜け出して、廊下に滑り出た。やけに喉がかわいていた。土間へゆけば、前の日に汲んだ水がまだ残っているだろう。窓の外から夜を割いて、かすかに梟の声が響いていた。

居間から父母の声がするのを聞いて、コダは足をとめた。

「――らしくないじゃないですか。どうしてまた、あんなおかしな子供を家に置く気になったんです」

「文句があるのか」

「そうじゃありませんが……」

めったに夫に逆らったことのないエレテが、めずらしく夫の真意を問いただしているらしかった。少年

を遠巻きに見ていた母親の、いかにも気味の悪そうなようすを思い出して、コダは眉根を寄せた。まさか、いまさら追い出せとでも言う気だろうか。

「女中もみな気味悪がっています。それに、近ごろどんな噂が立っているか、ご存知ですか」

ウートラの忌々しげな低い舌打ちを、コダは聞いた。それに怯えてエレテが黙り込む気配を感じながら、コダは迷った。喉は乾いているが、二人のいる部屋を通らなければ水は飲めない。

「好きに言わせておけ。まったく、ここらの連中の迷信深いことと云ったら、昔っからひとつも変わらん」

ウートラは吐き捨てるようにそう言った。まだ彼がいまの立場になる前、先代のウートラが存命だった頃に、この男は里を出ていた時期があった。領主の治める南方の港町で、学舎に通っていたのだ。

城下町とはいえ、はるかな王都には及ぶべくもない、鄙びた地方の小さな都市には違いなかったが、それでも港を擁する、雑多な人の行き交う街だ。そのころに見聞した知識をウートラは自慢に思っており、その分だけ里の人々の信心を迷信と云って見下すきらいがあった。「水神さま、水神さま！ 崇りだのなんだのと——まったく、うんざりだ！」

拳で卓を叩く音がして、コダは首をすくめた。ウートラはもうひとつ舌打ちをして、鼻息を鳴らした。「だがそれで連中の気が済むんなら、あのガキ一人を食わせてやるくらい、安上がりなもんだ。そうだろう？」

「どういうことです？」

飲み込めないようすで妻が訊ね返すのに、ウートラは長い嘆息を吐いた。

「お前もその空っぽの頭で、たまにはものを考えてみたらどうだ。このあいだの大水の時、連中、何と言った。覚えているか、え？」

短い沈黙をはさんで、おずおずとエレテが答えた。「祀りかたが足りないから、水神さまがお怒りになったと——」

「そういうことだ」

ぶつりと断ち切るように、ウートラは吐き捨てた。「ハッドラのやつ——昔はウートラが率先して自分の子を差し出したものだ、そう抜かしたんだぞ。お前もその場にいただろう、それとももう忘れちゃったのか。え？」

コダは息を呑んで、慌てて自分の口を手でふさいだ。幸いにも、居間の中にまでは聞こえなかったようだった。ウートラは鼻息荒くまくしたて続けた。

「冗談じゃない、うちにはあれ一人しかおらんのを承知で、あんなことをいいやがる——おれが気に入らんから、水神の崇りを口実に、後継ぎを始末しちまおうという腹だ。そうすりゃ次のウートラは、自分の息子だからな」

コダは息を詰めて、父親の言葉を胸中に繰り返した。

ハッドラというのは、彼の叔父、ウートラの実弟の名前だった。愛想のいい男だが、兄によく似た抜け目のない眼をしていて、昔から内心で兄を疎ましく思っているのを、隠そうとして隠しきれないようなところがあった。

コダは少年を拾ってきたときのことを思い出した。めずらしく上機嫌だったウートラの姿——吝嗇な彼にしては珍しいほど気前よく、無駄飯ぐらいが増えることを許した。

「じゃあ、コダの代わりに——」

「それで連中の気が済むんなら、安いもんだろう。いっそ早いところ水が出てくれれば、ますます安上がりで済むんだがな」

「そんな。だけでもし万が一、あの子供がほんとうに——」

エレテは言いさして、怯えるように言葉を飲み込んだ。ウートラがじろりと妻を睨むのが、壁を挟んだ

反対側にいても、コダには目に見えるようだった。

「お前も連中となにも変わらん。くだらん迷信なんぞに振りまわされて、馬鹿らしいとは思わんのか。悪霊なんぞおらん。水神もだ」

「だけど、それなら、あの瞳は……」

「ああいう色の目をした連中は、北方には珍しくもない。高地のなんとかいう国が、戦に負けたというからな。おおかたここまで逃げてきたんだろうさ……」

足音を立てず物置のかげにひそみ、コダは息を殺して、不毛な会話に倦んだ両親の気配が遠ざかるのを待った。それから静まり返った居間に滑り込むと、戸棚の奥を、慎重に探った。

目当ての銅貨はすぐに指先に触れた。これほど蒸し暑い夜だというのに、貨幣の表面は驚くほどひんやりと冷たく、コダはとっさに指を引っ込めそうになった。音を立てないよう、銅貨を一枚ずつそっと握りこむと、汗ばんだ指の間で冷たい感触が滑った。

手探りであるだけをかき集めても、たいした金額にはならなかった。ウートラは自分の財産のほとんどを家の外に隠しており、場所を家族にさえ教えようとはしない。家の中にあるのは、何か要りようになったときのためにエレテが預かっている、わずかな小銭ばかりだ。普段はそれで不自由もない。里にいるかぎり、金の遣いどころなどほとんどないのだから。

かき集めた小銭を握りしめて、コダは思い出したように土間に下り、甕の中でぬるくなった水を口に含んだ。

――やっぱり、水神さまの遣いじゃ、なかったんだな。

ふっとそう考えて、コダは口の端で笑った。まだ胸のどこかで、もしかしたらと思っていた自分に気がついて、それを滑稽に感じたのだった。

言葉がわからなかったのも、遠い国から逃げてきたからだったのだろう。攻め滅ぼされたという高地の国を、思い浮かべてみようとして、コダは失敗した。この狭い辺境の里を一度も離れたことのない彼にとって、見知らぬ遠い土地のようすというのは、ぼんやりと想像することさえ難しかった。

コダは忍び足で自室に向かった。廊下の窓から吹き込む夜風が、湿り気を孕んで重い。コダはちらりと窓から空を見上げた。いまは雲が切れて月が出ているが、空の端にはまだ重い雲が垂れこめている。しばらくは雨の多い日が続くだろう。そう遠くないうちに、水が出てもおかしくはなかった。

――そうすりゃ次のウートラは自分の息子だからな。

ウートラが口にした言葉を、コダは胸の内で繰り返して、声を出さずに笑った。彼自身は、父親の後を継いで次のウートラになりたいなどとは、一度だって思ったことがなかった。だからといって、何をやりたいたいという考えもなかったが……

幼いころ、コダは漁師になりたかった。河のほとりで遊ぶのが他の何より楽しく、魚を釣るのが好きだった。子供の釣り遊びとはまるで違う、大人たちの漁に憧れた。里の漁師たちはみな怠け者で、いつも木陰で昼寝してばかりいるが、いったん漁に出るとなれば早朝から何時間でも網を引き、木舟の底が抜けそうなほどの魚を持って帰る。その豪快な漁のようす、重い網を引く漁師たちの、筋肉の盛り上がった背中に、コダは飽きず見入った。

ある日コダは腕のいい漁師のひとりをつかまえて、自分も漁につれてゆけとせがんだ。男は困ったように眉を下げて、ウートラの坊っちゃんに、とてもそんなこたあさせられねえですと笑った。

後日、あきらめられずにコダはその男の家へ向かった。しつこく弟子入りをせがむつもりだった。家の前に着いたとき、中年女の太い声がした。「あんなガキにへいこらして、みっともないと思わないのかい」

コダは立ち止まった。「俺だって好きで頭下げてるわけじゃねえ」怒鳴り返すのが聞こえた。「だけど、ほかにどうしようがあるってんだ……」

続く口論に背を向けて、コダはその場から逃げ出した。この漁師をはじめとした里の人々の多くが、課せられた税を納めきれずに滞らせているということは、もっと後になって知った。その日から、コダが漁師になりたいと思うことはもうなかった。漁のようすを遠巻きに見つめるのもやめた……

コダは足音を殺したまま自分の部屋に戻ると、窓辺で眠る少年の肩をゆすった。

目覚めは早かった。びくりと体をこわばらせて、少年は息をのんだ。静かに、と身ぶりで示して、コダは手の中のわずかな小銭を少年の手に握らせた。困惑したようすで手の中の小銭を見下ろす少年の表情は、たしかに普通の子供とどこも変わりなかった。

「逃げろ」

コダは囁いたが、少年はやはり困ったように、彼を見つめ返すだけだった。このとき初めてコダは、言葉の通じないことに苛立ちを覚えた。

窓の外と少年の胸元を交互にゆびさして、コダはもう一度言った。「逃げるんだ。親父は、お前を殺すつもりでここに置いてる」

少年はやはり困ったような顔のまま、手の中の小銭を見た。コダはもどかしく何度も窓の外を指した。

いっそ窓から蹴り出しでもすれば、わけはわからずとも勝手に逃げ出すだろうか。コダはそう考えて、すぐに首を振った。大きな物音を立てれば、父親が起き出しに来るかもしれない。気付かれれば逃がすのが難しくなる。ウートラはみすみす損を見逃す男ではない――

そのときだった。少年がふいに、唇を動かした。

「オマエ、モ」

ぎこちなく、ひきつれたような声だった。

「お前、言葉……」

少年は薄い唇を再び閉じて、じっとコダを見上げた。月あかりのせいで、その顔は、まるで血の気の失せたように白く見えた。

コダは困惑した。言葉が通じていたのなら、何故いままで話せない振りをしていた？

その問いに、コダは自分で答えた。信用できなかつたからだ――言葉のわからない振りをしていたほうが、安全だと思ったからだ。ほかに何の理由がある？

そこまで考えて、コダは首を振った。「いや、なんでもいい。さっさと逃げるんだ。わかるか。逃、げ、ろ――」

だが少年は、はっきりと首を振った。

「逃ゲール、オマエ、モ」

コダはぽかんとして、口を開いたまま、少年の顔を見つめ返した。

逃げる？ ――自分が？

少年は、コダから視線を外さなかつた。呆気にとられたまま、コダはその緑の瞳を、まじまじと覗き込んだ。

こいつはどこまで事情が呑み込んでいるのだろうか、とコダは考えた。いったい何故、コダまで一緒に逃げなくてはならないなどと思ったのか。それとも単に、一人では心もとないからついてきてくれという意味なのか……だが少年の表情は、助けを懇願しているというふうには見えなかつた。

逃げる？ 何から？

ふっと、コダは胸に何か落ちこんでくるのを感じた。

次のウートラになりたいなどと、思ったことは一度もなかつた。それにも関わらず、自分が里の外に出る道もあるということ、を、どういうわけか、コダはこの瞬間まで、一度も考えたことがなかつた。ほかならぬ彼の父親が、後に戻ったとはいえ一旦は外に出て、その当時の話をだれかれとなく吹聴して回っていたにも関わらず。いや、そうした父親への反感と嫌悪が、却って彼の眼をその道からそむけさせていたのかもしれないなかつた。

――うちにはあれ一人しかおらんのを……

父親の忌々しげな声が、コダの耳に蘇った。もしかわりになる兄弟がいたならば、ウートラはためらわず彼を水神さまに差し出しただろう。それで連中の気が済むなら、安いものだと言って。

家を抜け出すのは簡単だった。

あらためて持ち出した荷物は何もなかった。それぞれ身一つに、子供の小遣いのような小銭を握りしめて、彼らは夜に滑り出した。

里に点在する家々のあいだをすり抜けるうちは息をひそめ、足音を殺して慎重に歩いた。

夜気は熱く蒸れていた。森から梟の声が間遠に響く。通りかかった畑では、麦の穂が頭を垂れている。いまのところ、次の収穫に不安はないように見える。水さえ出なければの話だが……

風は行く手、南から吹いている。このあたりではいつもそうだ。河をどこまでも南へ下りつづけると、はるかな先の世界の涯で、河面は煮えたぎってもうもうと蒸気を噴き上げているのだという。その話をコダは、いつか父親のひけらかした知識の中で知った。その蒸気が南から吹き寄せて、やがて冷え、雨を呼ぶ……

このまま風にさからってしばらく南へゆけば、いくつかの里を通り過ぎたのちに、大きな港町がある。世界の涯ではないが、ウートラがかつて若かりし時を過ごした町だ。港からは何隻もの大きな船が河をさかのぼり、あるいは支流を西に下って、遠くの街と行き来するという。

そこならば人が多いから、きっと身を隠しやすいだろうというのが、コダの考えだった。何なら船に乗って、さらに遠くまで逃げてもいい。これっぽっちの金では船には乗せてもらえないかもしれないが、着いてしまえば何か方法があるだろう……

少年は、言葉が充分にわかっているわけではなさそうだったが、コダが河の流れでゆくさきを指で示すと、理解したようにうなずいた。

アッロス河の水面が、月光をはじめてさざ波立っている。寝物語に水神の話を語り聞かせた祖母の声が、コダの耳の奥にはまだ残っていて、いまでも忘れたところに、しばしばふっと蘇る。くだらん迷信だと吐き捨てるウートラの声が、それに重なる。足どりがいつしかだんだんと速まってゆく。

人家からすっかり遠ざかったところで、どちらからともなく、二人は走り出した。

満月のおかげで、足元に不安はなかった。蒸し暑い夜気は、それでも走れば風になって、少しは涼しく頬を冷やした。息がはずむ。並んで走りながら、二人は目配せを交した。

足元を鼠か何か、小さな動物が慌てて逃げてゆくのが視界の端をよぎった。それが急に可笑しくなって、コダは笑った。口の端だけで小さく笑ったつもりが、気がつけば声に出ていた。

つられたようすで、少年も笑いだした。悪夢に魘されて発したときの、低くねじれた悲鳴と、同じ人間の声だとはとても思えないような、明るく澄んだ笑い声だった。

しばらく走るうちに、少年のほうがいづらか遅れ始めた。長く伏せて体力が落ちていたためだっただろうが、自分のほうが足が早いという小さな勝利感に、コダは嬉しくなった。気分が高揚していた。このまま走りつづけて、どこにでも行けるような気がした。

だが実際には、笑いながら走ったために、すぐに息が切れた。そうすると今度はそれが可笑しくて、コダはよけいに笑った。肩越しに振り返ると、少年と視線があった。月明かりをきらきらとはじめて輝く緑の瞳は、もう直視しても少しも恐ろしくはなかった。

月が明るすぎて、ふり仰ぐ目に眩しかった。走っていた四本の足がゆっくりと速度を落とし、やがて歩

く速さになって、少年がコダに追いついた。ずいぶん肉づきの戻った頬が、すっかり紅潮していた。

コダは足を止めた。

少年は息を整えながら、不思議そうに首をかしげて、立ち止まったコダと行く手とを交互に見た。その瞳に、いまは何の翳りも見えなかった。無邪気とさえ見えた。誰も信じないというあの眼差しは、いったいどこに消えてしまったのだろう。

コダはいつの間、そのまま立ちつくした。上った息を整える間、黙り込んで、眩しすぎる月を、じっと振り仰いでいた。

それからゆっくりと顔を下ろし、行く手、河の下ってゆく先を、手のひらで示した。

「行けよ」

少年はきょとんとして、首をかしげた。単純に言葉がわからなかったのか、それとも言われていることの中身が理解しがたかったのか、どちらだろうと、コダは考えた。

「ここからは、一人で行け」

言って、コダは少年の肩を乱暴に押した。少年は眼を見開いて、押された肩と、コダの手とを交互に見た。

コダはもう一度少年の肩を押すと、自分は踵を返して、もと来たほうへと戻りはじめた。

迷い迷い、少年が追いかけてくる気配があった。コダは立ち止まって振り返り、少年を睨みつけて、足元から石を拾った。少年が足を止めた。

その足元に、コダは石を投げつけた。まだ動かない少年を見て、コダはもう一つ石を拾った。さっきよりも大きな、尖った石だった。それを手に握って目を合わせても、少年はまだ動かなかった。コダの顔を、途方に暮れたような顔で、ただ見返していた。

コダが腕を振り被ると、ようやく少年は、ひとりで走り出した。そして何歩も行かないうちに、また振り返った。コダは歯を食いしばって、少年をにらみつけた。

このまま自分が一緒に逃げれば、ウートラは追手をかけるだろう。

叔父をののしるウートラの悪態を耳に思いだしながら、コダは考えた。あの父親は、きっとそうするだろう。出来の悪いひとり息子を心配するためにはではない。いずれ自分の血を引いてもいない人間に、自分の財を与えねばならないということには、とうてい我慢がならないからだ。それが彼自身の死後の話にすぎなくとも。

だからウートラは、ひとり息子の行方を追うだろう。だが、少年がひとりで逃げるなら？ そして自分が戻り、まるで違う方角に向かって、少年が逃げたと証言するなら？

振り返り、振り返りしながら走ってゆく少年の背中をめがけて、コダは石を投げた。石は当たるはずもなく、ずっと手前で地面に落ちたが、それでもその音は、少年の耳に届いたに違いなかった。それからは振り返ることなく、影は遠ざかっていった。

その姿がすっかり遠ざかって見えなくなるまで待って、コダはもと来た道を歩きだした。

河岸の月

<http://p.booklog.jp/book/71104>

著者：朝陽遥

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/hal00/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/71104>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/71104>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパバー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ